



四谷新巻

四

~ 13
3369
4



13
3369
4



西翁新怪實錄卷之四

右平怪女くわいぢよ一述お事

英
後ご分ぶんの治事し事

西宮新怪実録巻之四

菅平新屋の怪女通ふ事

菅平新屋の怪女通ふ事



谷静庵鼻こゝろ山鳥語持こゝろ危針こゝろ
こゝろ滑こゝろ腰こゝろ持こゝろ去こゝろハこゝろ菅平こゝろハこゝろおこゝろ話こゝろカ
こゝろおこゝろ話こゝろカこゝろおこゝろ話こゝろカこゝろおこゝろ話こゝろカ
こゝろおこゝろ話こゝろカこゝろおこゝろ話こゝろカこゝろおこゝろ話こゝろカ
こゝろおこゝろ話こゝろカこゝろおこゝろ話こゝろカこゝろおこゝろ話こゝろカ

多々平君一々遠公ハ世忠ニ似
又たよ一にてもあらんやと且其のこ
新少丹却一やうく等々女侍扶
たぬぬ之程夜も入五ツヨ侍り
まふ一も一也一塔侍等々之腕自交
に海たる夜はく一付ヨ吉平ハ塔の
ゆの一わうふ一ヤ一松家ホ今夜ハ
一門番新定侍等々成度ハ

と新ヤけれも塔よ海あじヨ遊
吉平ハ後中へ一と云
相平園家ハ中より人一と云
略リ一門番を勤事人
を門番の夜々等々其の事
いろく一にさ一忠家等の者ハ
後ハたる一と云一み吉平ハ門番
定海一と云一と云一人勤事人

益勢進をせし娘若し来じ
時引くし手紙知れぬ
是をのぞきし

先年と寸念しそ只の役目番
加喜人志をすも例のま
る好をまむ法をり一紙四つを
掛しそしをあらまし又井戸
へり部と手紙を法に傳是す

同九の降もあし是も先年より傳
る友とそしそも先年より傳
し掛し娘の形目先へし法に
極しそ来もやし時し八つの
降もあしうも来もやし先年
と法をすしむれとそし
後中しとあらし門の形を女子
め後下法に伝しそ時多し一紙

あてそきども人新もあし如新毎
際名をとるがあまき事一ニ之次
ちく甲月の夜は月の降りし
家新金の戸きりしとわくおと
きりりれ目成りしきんるさあ
木石物束をりしはる娘をりし
駕へ腰をぬき吉平と花を結ぶ
よきさきりしおまきりし

定るお福をりしおはるん先出とあそ
れよし云大何の挨拶もく笑を念
て志をりし唯りりみするおあ
吉平とむのりし和心と娘をりし
何人とも怒まきりしあんとはるさ
は娘をりし戸押りし言をりし
あきりし是れおあきりし
にあんとはるさおあきりし

か祿を裁主し候も何れと戸を
ありぬあまにありし是實
戸を明け候に候も戸に合意
由り候しと申すも表へ門の戸
候に候しと申すも
お又之候に毎夜来り候
候し候しと申すも
程もの候しと申すも



居候時七の鐘を鳴り候
て候し候しと申すも
や候し候しと申すも
より遠く又候し候しと申すも
あり候し候しと申すも
せん候し候しと申すも
如利あるも
此程の候し候しと申すも

こころの心持たきとも毎夜通じ
きたる後かきし年日解し一を戻
よも何処の振るも手控し
変る月の夜来るとは何ぞ
中根をうらみさき方へは女は
かとおく心さあしと世あは
側くあき腰ともし中無く
能くしたとあ人さあ物不

あまのこころの心持たきとも毎夜通じ
きたる後かきし年日解し一を戻
よも何処の振るも手控し
変る月の夜来るとは何ぞ
中根をうらみさき方へは女は
かとおく心さあしと世あは
側くあき腰ともし中無く
能くしたとあ人さあ物不

ふ松言述あゝ新秋述おゝゝ
に生うつしあゝ相月能似ゝゝ
是くあゝまゝゝ一庵言味ゝゝ
の秋来ゝゝ一が後家言能ゝ
ゝゝ又何んを言あゝたぐゝ
ゝゝんゝあゝんゝんゝんゝんゝ
母もあゝゝゝあゝあゝあゝあゝ
買ひ置汗地をゝゝゝ一坊名たゝ

あまの別限の跡もも只子何
戸はも明く秋消一あゝんゝ
ゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
末来もせあゝゝゝゝゝゝ
お家ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
遠入ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ
消ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

過^と之^らの^こ極^くに^は入^りき^まり
朽^く爛^{らん}の^あ極^くに^は入^りき^まり
て^は遠^とく^は海^の介^あは^らぬ^は極^くに^は入^りき^まり
の^い吐^はく^をあ^す時^はた^くと^は産^まれ^ば銀^は
葉^は子^は残^りは^らず^は是^れ皆^はい^まし^て云^はは^す
怪^まな^らず^は甘^くも^も時^はた^くと^は産^まれ^ば銀^は
お^とく^はは^らぬ^は極^くに^は入^りき^まり
明^かく^は定^まる^は内^の親^のあ^らは^れ極^くに^は入^りき^まり

北^はは^らぬ^は極^くに^は入^りき^まり
新^しし^は新^しの^い吐^はく^をあ^す
手^はは^らぬ^は極^くに^は入^りき^まり
角^は心^の内^の子^は斗^はり^は思^はひ^は侍^はり^は極^くに^は入^りき^まり
新^しし^は新^しの^い吐^はく^をあ^す
不^は良^はなる^は事^は極^くに^は入^りき^まり
打^はつ^はんと^はす^は一^はつ^はと^は侍^はり^は極^くに^は入^りき^まり
中^は極^くに^は入^りき^まり

よふ有る女と案一吉よに
取附たりと云をいしと墨彦
の女は吉よ母の陰謀の時
も其乳母は半しそる後
た女より形後者あり
時よ吉よの乳母の女の死一事を
由り乳母ゆふまゝそる有る
執程のりらよ遠くあし今言

きららじつきりしし
極に生一と思ふも元頃を
指定の接し油を多きに
法も作焼を万機ゆかくに
病にる度にいしはつら
か来らるるに九ら初も思ひ
口と多き家ゆしは下と云
是を少しなりたる所を遠く

みゆ あれを消し去る今宵に
かきつけて合点の明あれは
中遠る方知し玉得立出て戸を
と下吹風も一河花の火を消し
娘を籠のおそれも一内二遠る
そちうふり念とくして面袖の法も
流の少袖帯をまとむとる風長
髪を抱てよあがる昔年や一松今

育と何ししてすく来ぬさし
と流るる類をさし去るふも
らまに相恋のあしむれは
今迄度毎子通ひのついでに
あつとせむを二氣しむ
膏と肉の角尻はなほじり
て心つくと横をおもひ
後と人者もせん

一 ち〜〜 換好〜〜〜 凡〜
包解〜〜〜 玉府一斤入〜〜 指〜 是
おあ〜〜 今宵〜 附波〜 岩根の下
〜〜 福も〜 解 幸

後〜〜 代の〜 何〜 娘〜 包〜 紙〜 凡〜

後之身かきかして女たけ者なま有ある玉たま髪かみををすまま
自こ尔ろもも忘わらんんぞぞううんん松まつのの香か白はく子こ
大だい室しつ田でん片ぺんおおつつれれ毛けむむんんききし
のの通とつつるる毛け布ふにに振ふるる返かへりりええんん
者もの了り了り身み仕し舞ま舞ま身み中ちゆうへへええんん之之
女おんなののたたししりりすするる吉きち平へい女おんな乃な道みち
一一にに格かく述しゆ多た一一りりもも女おんな乃な道みち
折せ程りのの類るいひひおおひひ一一にに折せるる

後のちのの目めええ一一振ふるる一一甚しん掛か心こころ
にに娘むすめをを舞ま舞ま身み中ちゆうへへええんん之之
仕し舞ま舞ま身み中ちゆうへへええんん之之
悪あく敷しきのの先まへのの結むすひひたたるる
一一振ふるる後のちのの類るいひひおおひひ一一にに折せるる
おおくく一一始はじめ末まへ一一たたああもものの心こころ
のの類るいひひおおひひ一一にに折せるる

